



## 特別支援学級在籍児童の明確化要求に関する予備的 検討：行動カテゴリーの試作

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-03-08 キーワード: 作成者: 三浦, 哲, 伊藤, 文雄, 松田, 岳大, 武蔵, 絵里, 田村, 佳那 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00006025">https://doi.org/10.32150/00006025</a>

## 特別支援学級在籍児童の明確化要求に関する予備的検討

— 行動カテゴリーの試作 —

三浦 哲・伊藤 文雄\*・松田 岳大\*・武蔵 絵里\*・田村 佳那\*\*

北海道教育大学札幌校特別支援教育方法研究室

\*北海道教育大学附属札幌小学校特別支援学級

\*\*札幌市立屯田南小学校

## A Pilot Study of Request for Clarification in Students Attended at Special Class

MIURA Satoshi, ITO Fumio\*, MATSUDA Takehiro\*, MUSASHI Eri\* and TAMURA Kana\*

Department of Special Education, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

\*Hokkaido University of Education's FUZOKU Sapporo Elementary School

\*\*Tonden Minami Elementary School, Sapporo

### 概 要

本研究の目的は、小学校特別支援学級に在籍する児童の明確化要求について、リペアー・ストラテジー (Repair Strategy) と理解モニタリング (Comprehension Monitoring) に分類し、それぞれの行動カテゴリーを試作することである。

対象は、小学校特別支援学級の低学年クラスに在籍する小学校1・2年生の児童5名と、高学年クラスに在籍する小学校5・6年生の児童5名である。生活単元の授業中の表出をビデオ録画し、リペアー・ストラテジーおよび理解モニタリングを抽出し、行動カテゴリーを試作した。

### I はじめに

知的障害児や広汎性発達障害児は、発達年齢や精神年齢に比べて、言語の表出や理解の遅れが顕著であることが報告されている (藤原, 2010; 小林, 2003a; 2003b; Laws & Bishop, 2003; 西村・綿巻・水野・新見, 1984a; 1984b; 1984c; 大井, 2006; 岡崎・池田・長畑, 1986; 斉藤, 2002; 杉

山, 2002)。そのため、他者との会話の中で、相手の発話を理解できなかつたり誤解が生じるなど、円滑な相互交渉が成立しない状態、すなわちコミュニケーション・ブレイクダウン (Communication Breakdown) が頻繁に生じている可能性が考えられる。

その様な状況を回避するための方策として、明確化要求 (request for clarification) 行動があり、

リペアー・ストラテジー (Repair Strategy) はその代表例である (三浦, 1997; 2000)。例えば騒音などで相手の発話が聞き取れなかったり、未知の単語が含まれていた場合、我々は「聞き返し」等のリペアー・ストラテジーを活用することで、自らの聴取・理解困難な状況を相手に伝え、何らかの対応を求める。それに対し、相手が最初の発話を反復したり言い換えたり、新たな情報を追加することで、コミュニケーション・ブレイクダウンを回避することが可能である。

しかしながら知的障害児や広汎性発達障害児は、上記のように言語の表出・理解の発達に遅れがある上に、前言語期から「要求」等の伝達機能の表出にも遅れが認められる (Greenwald & Leonard, 1979; Mundy, Sigman, Kasari, & Yirmiya, 1988; 長崎, 1995; 長崎・池田, 1982; 斉藤, 1989; Smith & von Tetzchner, 1986)。また、その特徴が年長や成人まで持続する傾向も報告されている (Brady, McLean, McLean, & Johnston, 1995; 稲田・神尾, 2007; Lobato, Barrera, & Feldman, 1981; McLean, Brady, McLean, & Behrens, 1999; 佐竹・小林, 1989; 綿巻・西村・佐藤, 1984)。そのため日常会話において、リペアー・ストラテジーを適切に活用できない可能性が危惧されるが、知的障害児や広汎性発達障害児を対象とした研究は見あたらない (三浦, 2001)。

一方、リペアー・ストラテジーと類似した概念として「理解モニタリング (comprehension monitoring)」がある。例えば検者の言語指示に従って4枚の絵の中から1枚を選択する「対象伝達課題 (referential communication task)」では、故意に複数の絵に該当する様な曖昧な指示を与え、それに対して被験児が検者の指示 (メッセージ) の不十分さに気づいて明確化要求をするかどうかを評価する方法等で検討されている。その結果、健常児では、就学後にならないと理解モニタリング能力が表出されることが多いが、設定される課題によって結果が大きく異なることが示されている (Abbeduto, Davies, Solesby, & Furman, 1991 & Bearison & Levey, 1977; Bonitati-

bus & Flavell, 1985; Cosgrove & Patterson, 1977; Patterson, Cosgrove, & O'Brien, 1980; Patterson, O'Brien, Kister, Carter, & Kotsonis, 1981; Skarakis-Doyle, & Dempsey, 2008; Sonnenschein, 1986)。また学習障害や言語障害、知的障害においても類似の結果が報告されている (Abbeduto, Short-Meyerson, Benson, & Dolish, 1997; Abbeduto, Davies, Solesby, & Furman, 1991; Fujiki & Brinton, 1993; Kotsonis & Patterson, 1980; Skarakis-Doyle, MacLellan, & Mullin, 1990)。

そこで、実験的な課題場面を設定せず、できる限り日常的な会話場面の中で理解モニタリング能力を評価しようとする研究が行われている。Galagher (1981) は、1歳11ヶ月～3歳0ヶ月の幼児9名を対象に、検者との相互交渉場面において自発された明確化要求を観察した。その結果、全ての子どもが90分間に3～32回の明確化要求を行った。また9名中7名は「確認要求」、2名は「中立的反復要求 (問投詞と困難表明)」を多用しており、「特定の反復要求 (不明な部分にWh-を入れる)」は3名にしか観察されなかった。

また, Revelle, Wellman, & Karabenick (1985) は、3歳児と4歳児各14名を対象に、検者との砂遊びとままごと遊びの場面で、検者が事物を持って来るように子どもに求めた時の子どもの言語的明確化要求を観察した。検者による要求は「曖昧 (対象が2個または4個ある場合)」、「不明瞭 (あくびで指示が聞き取れない)」、「記憶 (5つの対象を一度に要求)」、「不可能 (重くて運べない冷蔵庫と、部屋の中にはない母親の靴)」であった。その結果、3歳児では「不明瞭 (あくび)」と「不可能 (運べない物・存在しない物)」の時に明確化要求が観察されたが、「曖昧 (対象が複数ある場合)」と「記憶 (指示が多すぎて記憶できない場合)」に対しては表出が認められなかった。一方、4歳児では、6種類の要求の全てに対して明確化要求が認められた。

この二つの先行研究から、少なくとも健常児については、意図的に設定された課題場面に比べて

自然な相互交渉場面の方が、年少時期から理解モニタリング能力が表出される可能性が高いことが示唆されたと言えよう。しかしながら知的障害児や広汎性発達障害児を対象とした研究は見あたらず、今後、これらの対象児について、自然な場面における理解モニタリングの表出状況を検討する必要があると思われる。

以上のように、リペアー・ストラテジーと理解モニタリングは別個の概念として、独立して研究が進められてきており、相互の関係について検討した報告は見あたらない。特に理解モニタリングは、当初、課題場面で検討されてきたため、両者の区別は比較的明確であったが、Gallager (1981) や Revelle, Wellman, & Karabenick (1985) の様に、自然な場面で理解モニタリングについて検討しようとする、両者の区別が曖昧になる。

そこで本稿では、リペアー・ストラテジーを「相手から提示された発話・情報に対する明確化要求」、理解モニタリングを「課題遂行に必要であるが、相手から提示されていない発話・情報に対する明確化要求」と定義づけることとする。つまりリペアー・ストラテジーは「言われたこと」への明確化要求、理解モニタリングは「言われていないこと」への明確化要求と定義づけることで、相互に排他的な区別が可能になるとと思われる。

この様に、本研究では、従来独立して検討されてきたリペアー・ストラテジーと理解モニタリングの表出状況の相互関係について、知的障害児および広汎性発達障害児を対象に検討することを目的とした。

しかしながら、上述の通り、知的障害児や広汎性発達障害児を対象としたリペアー・ストラテジーに関する先行研究は見あたらず、また理解モニタリングについても自然な会話場面での検討がなされていない。さらに理解モニタリングに関しては、明確化要求の表出の有無だけが主な検討課題となっており、明確化要求の表出形態や分類等についてはほとんど検討されていない。

そこで本稿では、特別支援学級に在籍する児童を対象に、授業場面におけるリペアー・ストラテ

ジーおよび理解モニタリングを示す明確化要求行動を抽出し、それぞれの行動カテゴリーを試作することを目的とした。

## Ⅱ 方法

### (1) 対象

対象は特別支援学級の低学年クラスに在籍する児童5名(小学1年生2名, 2年生3名)と、高学年クラスに在籍する児童5名(小学5年生2名, 6年生3名)の計10名である。就学猶予等はなく、全員、暦年齢通りの学年所属である。対象児の主な障害名は知的障害もしくは自閉症である。実施された検査は田中ビネーや WISC-Ⅲ等、一部不統一であるが、IQの平均は69.3である。コミュニケーション手段は音声言語であり、サインやカード等、AACを使用する児童はいない。

### (2) 手続き

低学年児と高学年児のそれぞれのクラスにおける生活単元学習の授業を1日1回、日を変えて計2回ビデオ録画した。1回の授業時間は45~50分間であったが、最初と最後の部分を除外し、中間の連続した40分間を分析対象とした。そのため、各対象児の分析時間は80分間である。

ビデオ録画にはフルハイビジョンのビデオカメラ(ビクター GZ-HM570)を2台使用し、死角が生じないように教室の2カ所に三脚で固定し、必要に応じて適宜カメラの向きを調整した。

ビデオ録画の終了後、ビデオ画像を再生しながら、対象児から自発されたりペアー・ストラテジーおよび理解モニタリングと判断される明確化要求行動を抽出し、分類した。なお、その際、リペアー・ストラテジーについては、三浦(2000)のカテゴリーを参照した。

## Ⅲ 結果と考察

表1は、本研究で試作されたりペアー・ストラテジーと理解モニタリング行動を分類した行動カ

テゴリーと、その定義および実例である。

リペアー・ストラテジーについては、三浦(2000)のカテゴリに修正を加える必要性は認められず、本研究においてもそのまま使用可能であった。

カテゴリは「非特定の」「特定の」「確認」の3つの大項目が設定された。「非特定の」方略は、相手の表出が聴取・理解困難であったことは分かるが、相手の表出のどの部分が理解・困難であったのかが不明であるため、相手は自らの表出を最初から全て反復しなければならない。一方「特定の」方略は、聴取・理解困難であった部分が明示されているため、相手はその部分だけを反復したり言い直したりすることで、コミュニケーション・ブレイクダウンを回避することができる。さらに「確認」は、相手の表出の聴取・理解は可能であったが、自らの聴取・理解が正しかったのか

どうかを確かめる方略であり、相手は肯定または否定するだけでコミュニケーション・ブレイクダウンの回避が可能である。

一方、理解モニタリングについては、リペアー・ストラテジーの行動カテゴリを参照して新たに作成した。リペアー・ストラテジーと同様に、「非特定の」「特定の」「確認」の3つの大項目が設定された。定義等もリペアー・ストラテジーと同様である。ただし、理解モニタリングの場合、相手から提供されていない情報に対する明確化要求であるため、リペアー・ストラテジーの行動カテゴリに含まれている「反復要求」は、理論上、必要ないと思われた。また、今回分析した計160分間の分析場面において、一度も表出が認められなかったため、行動カテゴリから除外することとした。

表1 行動カテゴリ

カテゴリー	定義(例)
リペアー・ストラテジー	
非特定の	相手の表出のどの部分が聴取・理解困難なのか不明な方略
非音声	非音声による方略(首を傾げる, 表情)
間投詞	間投詞による方略(「え?」, 「なに?」)
困難表明	聴取・理解困難を表明する方略(「分かんない」)
反復要求	相手に反復を求める方略(「もう1回言って」)
特定の	特定の情報を要求する方略 (他兄の「新入生歓迎会」に対して「新入生歓迎会って何?」)
確認	自分の聴取・理解を確認する方略 (他兄の「昔の車です」に対して「車?」)
理解モニタリング	
非特定の	どの情報が不足しているのか不明な方略
非音声	非音声による方略(首を傾げる, 表情)
困難表明	困難を表明する方略(「分かんない」)
情報要求	必要な情報を求める方略(「どうしたらいい?」)
特定の	必要な特定の情報を求める方略(「どの部屋に行きますか?」)
確認	自分の判断の正否を確認する方略(「2組ですか?」)

表2は、各クラスの対象児の表出数を合計した結果である。本稿の目的は、明確化要求行動のカテゴリーを試作することにあるが、今回試作した行動カテゴリーの妥当性を検討するために、結果の概要を分析することとした。

まず、リペアー・ストラテジーについては、低学年児が35回、高学年児が13回表出しており、低学年児の方が多い傾向であった。大項目では、両群ともに「確認」と「非特定の」方略が多く、「特定の」方略は相対的に少ない傾向が示された。また「非特定の」方略については、両群ともに「間投詞」だけが観察され、その他の方略は認められなかった。

一方、理解モニタリングについては、低学年児が21回、高学年児が27回表出されており、高学年児の方が多少多い傾向であるが、顕著な差は認められなかった。大項目では、年齢群によって異なる傾向が示された。すなわち低学年児では「特定の」と「確認」がそれぞれ9回ずつあり、「非特定の」方略は3回しか観察されなかった。一方、高学年児では「確認」が20回と圧倒的に多く、「特定の」が5回、「非特定の」が2回と少なかった。

リペアー・ストラテジーと理解モニタリングの両者の出現傾向について比較すると、低学年児は理解モニタリングよりもリペアー・ストラテジーの方が多く、逆に高学年児では理解モニタリングの方が多い傾向が認められた。この点について、リペアー・ストラテジーは直前に提示された発話についての聴取・理解困難の表明であるが、理解モニタリングは提示されていない情報に対する自覚や指摘が必要であるため、理解モニタリングの方が記憶や抽象的思考、課題遂行のための動機等の点で、より高度な能力が必要とされる可能性が考えられる。

上記のように、本研究において試作されたりペアー・ストラテジーおよび理解モニタリングに関する行動カテゴリーを用いて、小学校特別支援学級に在籍する児童の明確化要求行動について分析したところ、ビデオ資料を視聴しながらの分析に際しては、行動カテゴリーの分類や定義を参照す

ることで、各カテゴリーへの分類が容易に可能であった。また、実際に低学年児および高学年児の分析結果を整理したところ、各対象児群の特徴的傾向を見いだすことが可能であった。そのため、小学校特別支援学級に在籍する児童の明確化要求行動を分析可能な行動カテゴリーを作成できたと考えられる。

今後は、本行動カテゴリーを用いて、縦断的にデータを収集することで、特別支援学級に在籍する児童の明確化要求行動の発達特性について検討したいと考える。

表2 明確化要求の表出数

カテゴリー	低学年児	高学年児
リペアー・ストラテジー		
非特定の	10	5
非音声	0	0
間投詞	10	5
困難表明	0	0
反復要求	0	0
特定の	6	2
確認	19	6
計	35	13
理解モニタリング		
非特定の	3	2
非音声	0	0
困難表明	3	0
情報要求	0	2
特定の	9	5
確認	9	20
計	21	27

## 引用文献

- Abbeduto, L. Davies, B. Solesby, S. Furman, L. (1991) : Identifying the referents of spoken messages : Use of context and clarification requests by children with and without mental retardation. *American Journal on Mental Retardation*, 95(5), 551-562.
- Abbeduto, L. Short-Meyerson, K. Benson, G. Dolish, J.

- (1997) : Signaling of noncomprehension by children and adolescents with mental retardation : Effects of problem type and speaker identity. *JSLHR.*, 40(1), 20-32.
- Bearison, D. J. Levey, L. M. (1977) : Children's comprehension of referential communication : Decoding ambiguous messages. *Child Development*, 48, 716-720.
- Bonitatibus, G. J. Flavell, J. H. (1985) : Effect of presenting a message in written form on young children's ability to evaluate its communication adequacy. *Developmental Psychology*, 21(3), 455-461.
- Brady, N. C. McLean, J. E. McLean, L. K. Johnston, S. (1995) : Initiation and repair of intentional communication acts by adults with severe to profound cognitive disabilities. *JSHR.*, 38(6), 1334-1348.
- Cosgrove, J. M. Patterson, C. J. (1977) : Plans and the development of listener skills. *Developmental Psychology*, 13(6), 557-564.
- Fujiki, M. Brinton, B. (1993) : Comprehension monitoring skills of adults with mental retardation. *Research in Developmental Disabilities*, 14, 409-421.
- 藤原加奈江 (2010) : 自閉症スペクトラムのコミュニケーション障害. *音声言語医学*, 51(3), 252-256.
- Gallagher, T. (1981) : Contingent query sequences within adult-child discourse. *Journal of Child Language*, 8, 51-62.
- Greenwald, C. A. Leonard, L. B. (1979) : Communicative and sensorimotor development of Down's syndrome children. *American Journal of Mental Deficiency*, 84 (3), 296-303.
- 稲田尚子・神尾陽子 (2007) : アスペルガー障害の語用論的特徴 - 成人一事例の会話分析の知見より -。 *児童青年精神医学とその近接領域*, 48(1), 61-74.
- 小林隆児 (2003a) : 自閉症のことばの成り立ちを考える (第1部) 青年期・成人期編。 *児童青年精神医学とその近接領域*, 44(1), 16-37.
- 小林隆児 (2003b) : 自閉症のことばの成り立ちを考える (第2部) 幼児期編。 *児童青年精神医学とその近接領域*, 44(1), 38-48.
- Kotsonis, M. E. Patterson, C. J. (1980) : Comprehension-monitoring skills in learning disabled children. *Developmental Psychology*, 16(5), 541-542.
- Laws, G. Bishop, D. V. M. (2003) : A comparison of language abilities in adolescents with Down syndrome and children with specific language impairment. *JSLHR.*, 46(6), 1324-1339.
- Lobato, D. Barrera, R. D. Feldman, R. S. (1981) : Sensorimotor functioning and prelinguistic communication of severely and profoundly retarded individuals. *American Journal of Mental Deficiency*, 85(5), 489-96.
- McLean, L. K. Brady, N. C. McLean, J. E. Behrens, G. A. (1999) : Communication forms and functions of children and adults with severe mental retardation in community and institutional settings. *JSLHR.*, 42(1), 231-240.
- 三浦 哲 (1997) : 聴覚障害幼児による訂正方略の活用。 *聴能言語学研究*, 14(1), 14-18.
- 三浦 哲 (2000) : 聴覚障害幼児の訂正方略の活用に関する縦断的検討。 *聴能言語学研究*, 17(1), 1-7.
- 三浦 哲 (2001) : 訂正方略の活用と応答に関する文献的考察。 *北海道教育大学紀要(教育科学編)*, 51(2), 63-73.
- Mundy, P. Sigman, M. Kasari, C. Yirmiya, N. (1988) : Nonverbal communication skills in Down syndrome children. *Child Development*, 59, 235-249.
- 長崎 勤 (1995) : [実験1] ダウン症乳幼児と健常乳幼児における要求場面での伝達行為の横断的検討, ダウン症乳幼児の言語発達と早期言語指導, 39-77. 風間書房。
- 長崎 勤・池田由紀江 (1982) : 発達遅滞乳幼児における前言語的活動 - ダウン症乳幼児と正常乳幼児の要求場面での伝達行為の分析 -。 *発達障害研究*, 4(2), 114-123.
- 西村辨作・綿巻 徹・水野真由美・新見明夫 (1984a) : ダウン症児の言語発達障害とその誘因要因 - 1 -。 *発達障害研究*, 5(4), 295-301.
- 西村辨作・綿巻 徹・水野真由美・新見明夫 (1984b) : ダウン症児の言語発達障害とその誘因要因 - 2 -。 *発達障害研究*, 6(1), 65-71.
- 西村辨作・綿巻 徹・水野真由美・新見明夫 (1984c) : ダウン症児の言語発達障害とその誘因要因 - 3 -。 *発達障害研究*, 6(2), 140-149.
- 大井 学 (2006) : 高機能広汎性発達障害にともなう語用障害。 *コミュニケーション障害*, 23(2), 87-104.
- 岡崎裕子・池田由紀江・長畑正道 (1986) : ダウン症幼児の発達特徴に関する分析的研究 (続報)。 *心身障害学* 研究, 10(2), 59-71.
- Patterson, C. J. Cosgrove, J. M. O'Brien, R. G. (1980) : Nonverbal indicants of comprehension and noncomprehension in children. *Developmental Psychology*, 16 (1), 38-48.
- Patterson, C. O'Brien, R. G. Kister, M. C. Carter, D. B. Kotsonis, M. E. (1981) : Development of comprehension monitoring as a function of context. *Developmental Psychology*, 17(4), 379-389.
- Revelle, G. L. Wellman, H. M. Karabenick, J. D. (1985) : Comprehension monitoring in preschool children. *Child Development*, 56, 654-663.
- 斉藤佐和子 (1989) : ダウン症児の始語獲得期における

- 認知発達。聴能言語学研究, 6(1), 20-27.
- 斉藤佐和子 (2002) : ダウン症児者の言語発達に関する最近の研究。聴能言語学研究, 19(1), 1-10.
- 佐竹真次・小林重雄 (1989) : 自閉症児における語用論的伝達機能の発達に関する研究。特殊教育学研究, 26(4), 1-9.
- Skarakis-Doyle, E. Dempsey, L. (2008) : The detection and monitoring of comprehension errors by preschool children with and without language impairment. *JSLHR*, 51(5), 1227-1243.
- Skarakis-Doyle, E. MacLellan, N. Mullin, K. (1990) : Non-verbal indicants of comprehension monitoring in language-disordered children. *JSHD*, 55(3), 461-467.
- Smith, L. von Tetzchner, S. (1986) : Communicative, sensorimotor, and language skills of young children with Down syndrome. *American Journal of Mental Deficiency*, 91(1), 57-66.
- Sonnenschein, S. (1986) : Development of referential communication : Deciding that a message is uninformative. *Developmental Psychology*, 22(2), 164-168.
- 杉山登志郎 (2002) : 高機能広汎性発達障害におけるコミュニケーションの問題。聴能言語学研究, 19(1), 35-40.
- 綿巻 徹・西村辨作・佐藤真由美 (1984) : 話しことばをもつ自閉症児における発話の機能。聴覚言語障害, 13(2), 43-60.

- (三浦 哲 札幌校教授)
- (伊藤 文雄 附属札幌小学校)
- (松田 岳大 附属札幌小学校)
- (武蔵 絵里 附属札幌小学校)
- (田村 佳那 札幌市立屯田南小学校)